

Title	<大會抄録>ティムール朝國制
Author(s)	安藤, 志朗
Citation	東洋史研究 (1992), 51(3): 517-517
Issue Date	1992-12-31
URL	http://dx.doi.org/10.14989/154410
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

れた。繼いで三十一年に、江蘇省農民銀行が縣内第四區の鎮・村單位の調査を行なった。四〇年の滿鐵による無錫農村調査は、榮巷鎮に屬する小丁巷・鄭巷・楊木橋の三村であるが、このうち楊木橋は二九年の二二村の一つであり、三十一年の調査は榮巷鎮を含んでいる。残念ながら、二九年の調査は現在の所は殆ど利用できないため、報告では後者によって滿鐵の調査を相對化し、舊中國の農村經濟に關する若干の論點を提出したい。

ティムール朝國制

安藤 志朗

ティムール朝の宮廷及びディーワーン機構の假說的再構成。インシャー作品の援用に基づく「國家」體制の枠組に關する假說の見解。これら二つの假説は、バイスングルの宮廷から傳わるミニアチュールの下繪一片のモチーフに如何なる解釋を要求するか。

イスラム法の相傳について

—— 民事責任を例として

柳橋 博之

イスラム法の規定はしばしばカズイスティックであると言われ

る。つまり、イスラムの法學者は、主として個々の事案をいかにして解決するかに關心があり、理論化・體系化を怠っているというのである。

確かにイスラムの法學書において體系的な説明に出會うことは少ない。それは單に記述の體裁の問題ではなく、類似の事案が一見して異なつた解決を與えられ、しかも法學者自身が一貫した説明を與えられない場合が往々にしてあるということである。

そうなた理由は様々であるが、一つには、倫理的な動機のために個々の事案の解決の一部が放棄されたり、あるいは解決が繼承されながら、その原理が忘れられたりしたという事情も手傳つてゐる。

ここではこのことを、ハナフィー派とマールイク派における、民事責任の理論を例として檢證する。具體的には、第一に、引渡前に賣主の占有下で滅失した賣物に關する危険負擔と、第二に、侵奪者の許で滅失した物及びそこから侵奪者が享受した使用收益の補填の問題を採り上げる。

北インド(ラージャスターン東南部)における

都城(qasba)の形成過程

—— 一六五〇～一八五〇——

佐藤 正哲

一七～一八世紀のこの地域の村は、その村域に關して、一方では